のように活動がままならなくなる状況が起きる可能性は、今後は十分ありうる」と危機感をにじませる。

同連盟は4月の総会で、新たに連盟として指導人材の「苫小牧吹奏楽連盟サポーターバンク」を新設することを決めた。いざという時、人材確保をスムーズにできるよう設けたものだ。まだ登録に手を挙げている人はいない。松原会長は「現実問題、指導者になるよ、という人を見つけるのは難しい。ですが今、できることをやっていきます」という。

吹奏楽をする子は、放課後活動の多様化や少子化などを背景に減少している。同連盟は吹奏楽に興味を持ってもらえるよう、今年初めて、学校での楽器体験会をスタートした。

サポーターバンク新設を決めた総会

部活動「地域移行」いったいどうなる？

近年、教員の長時間勤務が課題となり、部活は平日は4日、2時間まで、土日もどちらか1日のみ、3時間までと制限がかけられている。4月から、大会前はその限りではなかった特例も無くなった。

そして国は昨年、休日の部活動を学校ではなく、地域のクラブなどが運営していく形に2023年度以降、段階的に移行してほしいという考え方を示した。平日については地域実態などに応じて…となっているが、すでに、下記の安平町のように、平日も含めて完全に、学校から部活の運営を地域クラブに移そうという方針を固め、準備を進めている自治体もある。

ただ、地域に受け皿や指導者不足が懸念されることから、指導を希望する人材を広く募る考えだ。また、スポーツ、文化系ともに、移行後も指導者を続けたいという教職員は、引き続き携わることができるように体制を整備していく。なお、市教委は現段階では吹奏楽部、美術部の指導者確保だという。

このほか、むかわ町では、方針として土日、平日ともに、受け皿となる総合型スポーツクラブへの運営移行を目指しているという。今年度は、情報収集や体制構築の在り方を探る。

◆◆◆

近隣自治体では、少子化の中、現在の活動は、苫小牧の学校の部活動に一緒に参加しているケースや、地域の少年団と合同で部活動を行っているケースなど、さまざまな形態がある。

小中学校と高校の連携は、所管が地元の教育委員会と道教委という壁があるが、「もう、そうは言っていられない状況がある。今後は中学の部活動と、高校部活動が連携をしていかなければ、厳しい」とした自治体の担当者も。

外部指導員について、予算を確保したものの、人材が見つからず、足踏み状態になっているケースもある。無償で教えていた人に、有償の指導員をお願いしても、それによって責任が重くなることなどから、スムーズに了承は得られない状況もある。「都市部は人材がいるのかもしれないけど、地方にとって受け皿の確保は本当に、難しいこと」と、戸惑いも広がっている。

なお、安平町、厚真町、むかわ町の3町は、情報交換の場を設けている。「指導者の確保が困難な中で、指導者がいる町に、別の町の子どもたちが参加できる形がとれるならば、やりたいことができる環境を広域で確保できるのでは」と、広域連携の在り方を模索している。

部活動の地域移行
安平町は6月から試行へ

2018年の胆振東部地震で、安平町のスポーツ環境は、体育施設の被災などにより激変した。危機感を覚えた町民有志は、総合型スポーツクラブ「NPO法人アビースポーツクラブ」を設立。町民のスポーツ環境整備に取り組んできた。

部活動の地域移行を踏まえ、安平町教委は、同法人と連携。

「部活動」のみで、地域移行を捉えるのではなく、広く、まちづくりや生涯学習の観点から取組を進めることとした。

「地域としてスポーツや文化活動を継続していけるよう、環境整備を進めていきたい。先生方には、子どもたちの学習に専念してもらい役割を分散することで、子どもたちに、より良い環境をつくっていけれ

ば」と町教委の担当者。

方針としては、遅くても令和7年度末まで、現在ある中学校のスポーツ系、文化系部活動すべて（9部活動）を平日、休日とも、地域クラブの運営とすることを目指している。

そのため、今年6月から試行的に準備ができた部活動から、同法人による運営へと移行させる。

全国的に地域移行の場合、指導者への謝金など新たな保護者の費用負担増が懸念されているが、安平町は、試行期間中は町が委託費に指導者謝金も含めており、保護者負担は試行期間に運営状況を見ながら検討する予定。本格的にスタートとなる場合に、どういう料金体系であれば持続的にやっていけるのかを探っていく。本格スタートに向けて今年度は、地域おこし協力隊の枠組みを活用。指導者となる人材確保や料金体系も含めた体制構築の検討を進めていく。

なお、部活動の指導ができるという教員には、引き続きクラブで担ってもらう。課題は吹奏楽部、美術部の指導者確保だという。

このほか、むかわ町では、方針として土日、平日ともに、受け皿となる総合型スポーツクラブへの運営移行を目指しているという。今年度は、情報収集や体制構築の在り方を探る。

◆◆◆

近隣自治体では、少子化の中、現在の活動は、苫小牧の学校の部活動に一緒に参加しているケースや、地域の少年団と合同で部活動を行っているケースなど、さまざまな形態がある。

小中学校と高校の連携は、所管が地元の教育委員会と道教委という壁があるが、「もう、そうは言っていられない状況がある。今後は中学の部活動と、高校部活動が連携をしていかなければ、厳しい」とした自治体の担当者も。

外部指導員について、予算を確保したものの、人材が見つからず、足踏み状態になっているケースもある。無償で教えていた人に、有償の指導員をお願いしても、それによって責任が重くなることなどから、スムーズに了承は得られない状況もある。「都市部は人材がいるのかもしれないけど、地方にとって受け皿の確保は本当に、難しいこと」と、戸惑いも広がっている。

なお、安平町、厚真町、むかわ町の3町は、情報交換の場を設けている。「指導者の確保が困難な中で、指導者がいる町に、別の町の子どもたちが参加できる形がとれるならば、やりたいことができる環境を広域で確保できるのでは」と、広域連携の在り方を模索している。

者が不足している場合、活動の場が無くなるのではという懸念や、講師料などにかかる保護者の負担がどうなるのか等々、さまざまな課題がある。

苫小牧市教委は、まだ、土日だけの移行をするのか、平日もすべて移行するのか、参加する子どもたちの料金負担や、市教委として補助金をどうするのか等々、具体的な方針を出していない。

スポーツ部活動については苫小牧市スポーツ協会、民間のスポーツクラブなどで構成する「部活動の在り方に関する検討委員会」という組織を立ち上げ、地域のスポーツクラブやスポーツ少年団などを受け皿として想定し、検討を進めている。吹奏楽を含む文化系の部活動については、今後の検討事項という。

運動系、文化系ともに指導

POINT！

多分これは「地域づくり」の話である。

苫小牧での部活動の地域移行が、「良くなること」なのかどうなのか分からない。やり方次第なのだと思う。苫小牧では判断できるだけの動きには、まだなってはいない。

課題の一つは、保護者の費用負担がどうなるのかだ。国や市が、どれだけの予算をここにかけていくのかを、見ていかねばならない。誰でも等しく学びを得られる場としての部活動を、いかに守っていくのか。子どもたちの成長にかかわる、重要な問題だ。

ある教員が語っていた。地域には、たくさんの人材がいる。そういう人の生きざまや技術を、子どもたちに伝えてもらう。生き方が多様である事を、地域の多様な人材から学べる「開かれた学校」であればいい。そんな話だ。

地域の力を生かせば、やり方次第で多彩で豊かな活動になるかもしれない。地域移行は、「部活動」をどうするのかというより、安平町が取り組んでいるように「地域づくり」や「人づくり」の話になってくるのだろう。地域の人材を掘り起こし、その力を行政が引き出し、地域が応える。地域と両輪で進んでいける器の大きさが行政や学校にどれだけあるかが、鍵を握る。例えば「こういう活動があるよ」と、民間クラブのチラシを子どもに渡してもらう、それだけでも大きい。それさえ難しいのが今なのだから。

これで今号の特集を終えるが、次ページは演劇の話。子どもたちの活動の場を守ってきた人の話だ。場を与えられた子たちが、今、苫小牧の文化を支え、つないでいる。